

## 1 はじめに

パンデミック前、ある俳句大会後の懇親会でのことである。隣席のある結社の主宰が、開口一番に「私は高柳重信の句会に出たのです」と語り出した。その主宰が二十過ぎの頃といい、六十年近く前のことである。それを語る顔は懐かしく、また誇らしげに紅潮していた。当時の若者を虜にした重信。

重信の人生で影響を受けたものを五つ挙げるができる（なお、この論においては、人間重信に焦点化し、俳人・俳句などの影響は除いている）。戦前期の重信に当てはめれば、①は始祖たる「大宮某」と明治気質の祖父母。②は関東大震災と富士山。③宿痾の肺結核。④十五年戦争。そして、⑤はフランス象徴主義と皇国史観。⑤の思想・精神においては、個人は時代の影響を受ける一方、自らがつかみ取ることができる。

重信は、どのように戦前期の時代思想・精神からの影響を受け、また一方ではその後何に自らつかみ取っていったのであるうか。

## 2 青少年期の思想・精神形成

重信の小学時代の自然との対話は、山嶺へのあこがれから次の様に描かれている。

《富士と筑波とを眺めてくらす日々は、その山々の麓に住み、日毎それを仰ぎながら生きている人々に、なにがしらの心を常にかよわせることでもあり、そこには、おのずからの連想力による交感が、自然に準備されていたのである。》〔①〕

少年時代、重信の身边に靈魂に満ちたものが存在していたのである。このアニミズムの体験は、後年の自然の感応の土台となる。

### 金魚玉明日は歴史の試験かな

（高柳重信『前略十年』『高柳重信全集Ⅰ』）

この句は中学二年の夏休み前の期末試験を詠んでいる。

《その新任の教師の教えは、それ自体が一つの意志を以ているのに等しい大きな歴史的な時間の流れと、それに確固たる志を抱いて意識的に関わろうとした人物の事績を、あたかも我がことのごとく痛感しながら学べというものであった。》〔②〕

この歴史の教師は久保田収といい、重信は「心の恩師」と述べている人物である。〔③〕久保田は、東京帝国大学国史学科卒業後、重信の中学校に赴任。大学在学中は平泉澄に学び、その高弟として知られ、終生師事する。

彼は「あの皇国史観の権化といわれる平泉澄の忠実な門下生」（重信）であった。その授業は、「それまでとは一変した型破りな」もので、いわば感情移入の〈感覚・フィードリング〉の歴史教育である。

《いつも私は楠木正成公や新田義貞公北畠顕家公などの率いる軍勢の中にいて、（略）しかも、なぜか私は、死に直面する場面が好きであった。ただ見事に敗れることのみを第一義として湊川に赴いた楠木正成公が、炎熱の日射しに渴きながら執拗に血戦を挑んだのち、

一族ともども七生報国を誓って薨去されたとき、私も同じ誓いの下に死んでゆくのであった。》〔④〕ここに詩精神の魂の彷徨が見られる。

重信の讃仰する楠木正成像は、「朝敵」から「忠臣」へと時代とともに変わっていく。戦時下において、若者は楠木正成の思想を抛り所として決死の覚悟を固めようとしていた。自らを軍国少年であったという重信には、ナショナルなものとその運命に対するヒロイックな共感があったのである。

久保田は、西洋史も担当し、その感情移入の授業を展開している。重信と同学年の田中正俊（中国史・東洋史学者）は次の様に記している。「フランス革命でルイ一六世が処刑される際は歴史的事件にもかかわらず、まことに残念とひたすら嘆いていた」。また、「勃発したばかりのスペイン内戦では反乱軍のフランコばかりを応援していた」という。〔⑤〕

また、久保田は平泉の四天王の一人に数え上げられていた。彼の授業のあり様は師の平泉に近いものである。重信は、この歴史の授業に熱中した。久保田は数年で転任してしまつたが、重信は後年、戦時下の発病の際の抛り所として種々の歴史に関する書物を読むこととなる。「僕は、青少年時代の数年間、病臥のつれづれに、いくらか歴史を独学したことがあった。」〔⑥〕

この歴史書の中には平泉の著作も含まれていたであろうことは次のことから分かる。

《兄の蔵書には、こうした文学書の他に、分厚い歴史書がかなりありました。（略）吉田松陰、藤田東湖、神皇正統記、平泉澄といった（略）これらの書籍は、群馬の母の実家で、私たちと共に敗戦を迎えました。》〔⑦〕

これらは、妹が発見した皇国史観の書物であった。具体的な書名は不明であるが、吉田松陰、藤田東湖も平泉の重視した人物である。そして、彼自身松陰らに関する論文等を作成している。また、『神皇正統記』はファシズムの抛り所にもなっていた。

### 3 平泉澄

久保田の師、平泉澄は東京帝国大学文学部国史学科において敗戦まで教授。専門は日本中世史。国体護持のための歴史を生涯にわたって説き続けたことから、代表的な皇国史観の歴史家といわれている。

皇国史観について、「広辞苑」では次のように説明されている。「国家神道に基づき、日本歴史を万世一系の現人神である天皇が永遠に君臨する万邦無比の神国の歴史として描く歴史観。近世の国学などを基礎にして、十五年戦争期に正統的歴史観として支配的な地位を占め、国民の統合・動員に大きな役割を演じた」。戦時下、当時の文学者の踏絵ともなつた。現在も皇国史観は、教科書検定などへも影響を及ぼし続けている。

立花隆は、平泉澄についてこう記している。

《あの時代（昭和戦前期から戦中期）の日本において、平泉は社会的に最も大きな影響力をふるった東京帝大教授であった。どのような影響かという点、皇国日本最大のイデオログとしての影響力である。》〔⑧〕

敗戦後、公職追放となるものの戦犯とはならず、戦後も長く主義を曲げずに通している。

その戦後の姿は、「王佐の夢破れた革命家のある種の抵抗」というものであった。〔⑨〕

平泉史学は、次のようにとらえられる。

《皇国理念の啓示の閃光を、日本史の聖書と聖人の中に明らかにし、それによって日本人

の内面に、皇国理念の力強さを復活させ、政治的な行動への意欲を発条させることに見いだされる。》〔10〕

次に平泉の講義はこう伝えられている。

《それは体系的な思想史とは言いがたく、次々と連想をつなげて道徳訓話を語るといような感じである。》〔11〕

そして、実際に聴講した丸山眞男が当時の様子を次のように語っている。「これは大変な講義で、新田義貞の後醍醐天皇に対する誠忠を話す段になると、澎湃として涙を流すんですね」。門下生の久保田へも影響を与えた講義ぶりであった。

つまり、歴史上の人物に「心境推測」し、多様な物語を紡ぎ出すのである。

また、十五年戦争下に刊行され、重信も目にしたであろう平泉の著作の主なもの次は次のようになる。①が学術書、②は啓蒙書である。

①一九三二年『国史学の骨髄』平泉史学

三六年『万物流転』歴史観の提示

② 三四年『建武中興の本義』人物評

四三年『天兵に敵なし』皇国護持の書

特に『天兵に敵なし』は、日本精神や楠木正成、北畠顕家などの人物を通じて国史の神髓を明らかにするものであった。〔12〕

平泉澄の影響は、当時の多くの学生、軍人にも及んだ。立花隆は平泉の高弟の竹下正彦中佐の次の言葉を引いて説明している。

《平泉史学が陸軍将校に及ぼした影響は、案外に根深いものであったと私は考えている。特に若い層に、無意識のうちに、深く鋭く根を下ろしたと思つているのである。(略)天皇陛下の万歳を唱え、笑って散華して行った、狂信的とも思われる若い将校の行為の強い支えとなつていたのではないかと、私は常に考えている。》〔13〕

さらに、平泉が賞揚した北畠親房、楠木正成、吉田松陰らはみな非業の死をとげる。「平泉はそこにこそ、日本精神の美学の極致を見出したのである」(立花隆)。その美学に若者たちが感化されていったのである。後述の鮎川信夫も影響を受けたと記している。

#### 4 高柳重信への影響

平泉の思想・精神、特にその精神は久保田から重信にも影響を与えた。

《すでに過去となつていいる歴史的な事件を、あたかも我がことのごとく痛感せよという教えは、少年期の私の心に不思議なときめきを喚起したようである。(略)この若い教師の情熱的な授業は、いわゆる皇国史観は別として、その後の私に大きな影響を及ぼしたように思われる。》〔14〕

戦時下の時代が、重信の感受性・精神に運命をもたらしたのである。

平泉が自身の皇国史観において重視したのは後醍醐天皇である。阿川弘之の『井上成美』では、平泉は「建武中興の故事、吉野朝の哀史を静かに説き去り説き来たり」と描く。戦後も旺盛な執筆活動を行い、憲法改正の論陣を張った。この時代に抗し、簡単に引き下がらないというしぶとさは彼が貴んだ南朝精神というべきものであろう。

重信は、祖先の大宮某が南朝方伊勢北畠氏に属し、南北朝末期から後南朝期に活躍したことから南朝、特に後南朝に心を寄せるようになる。

さらに、平泉が重要視するのは天皇であり、天皇に影響を与えられる少数の人々である。歴史を変えられるのはつねに少数者であり、民衆は、英雄の価値観を模倣する存在に過ぎないとした。<sup>〔15〕</sup>

一方、重信はエリートと彼らの自覚、少数派・少数の突出部を尊重する。そして、「終始一貫してエリート」であろうとして来たと述べている。これは、先の平泉にも通底するところである。

次に、敗戦時の平泉の門下生の動きである。彼らの一部は、宮城事件（八月十四日夜に軍部の起こしたクーデター未遂事件）を引き起こしている。平泉は、「同学が一番奮闘し、数多くの血を流したのは、二・二六と今度」であるとその直後に語っている（植村和秀）。その際に、門下生の首謀者の将校二名、および同門の阿南陸軍大臣が自決している。なお敗戦時には、軍人さらに民間人に自決する者が多数出ている。

一方、重信の敗戦時は、「魂も身体も根こそぎ病んでいた」彷徨の時期であった。その時の行動として、次の記述が残っている。

《十月、福寿院本堂にて勤皇文庫『保健大記』・『中興鑑言』を筆写、亡国を嘆ず。なお時期不明なるも、憂国の情を発し「群」にいた小崎均一等とある種の行動を企画したと推定される。これは志においては、後の三島由紀夫の自刎事件の情と相似したものであった。》<sup>〔16〕</sup>

この勤王文庫の内容は、前者が江戸中期の儒学者栗山潜鋒による尊王論。後者は同期の朱子学者三宅観瀾による建武中興の後醍醐天皇の事績の書であった。敗戦までは、本土決戦による「一億総玉砕」を信じ、行動しようとした国民も多かった。重信は、無常観にとられ何らかの「憂国の情」から自決に思いを寄せたであろうと推測される。その裏付けとなるものとしては次のことがあげられる。

重信は、三島由紀夫について彼の自決の翌年の七一年にこう語っている。

《三島由紀夫の死については、すでに、さまざま意見が述べられているようですが、（略）彼の天皇についての見解も、この日本という国の精神の時間を真剣に考えようとするとき、最高の持衰として、そこに一柱の神もどきたるべき存在を思うことが、ただちに狂気の沙汰だとは、簡単には言いきれないような気がするのです。》<sup>〔17〕</sup>

この事件後しばらくは、三島と交流のあった人物でも哀悼の意を表明することが憚れていた。そのような時期であったが、重信は右記の三島の心情を推し測る弁を吐いている。

## 5 敗戦後の影響

平泉の皇国史観は、十五年戦争時、国威発揚として「ひろく受け入れられ、人生に指針を与えるものとして若者のなかにも影響力を持ったが、当然のことながら、戦後には反革命、反動、戦争協力の歴史学として厳しく断罪されることとなった」。<sup>〔18〕</sup>

平泉の敗戦後の重信への影響だが、明らかなことは久保田の授業を通しての（フイーリング）感受であり、想像力である。

《したがって、もしも私自身がその渦中に立っているとしたら、どのように感じ、どのように思い、どのように行動するであろうかと、さまざま感情の動きなどを想定しながら、いつそ我が身に引き寄せて判断してみることが、いつしか私の習慣のごとくになってきた。》<sup>〔19〕</sup>

また、平泉澄自身は「清廉な人格と言動の首尾一貫性、政治への積極的関与と一定の政治的影響力の獲得においても、そしてまた、人身攻撃の目標とされ、真意を理解されずに批判される」人物であった。〔20〕

一方の重信は、敗戦後のその言動から周囲より「グループの中でもっとも血の気が多かつた僕が、(略)一部から青年将校とあだ名された」と述べている。〔21〕また、他にも「喧嘩高柳」と評されている。

さらには、敗戦後の社会状況への反発から「偽前衛派」を著した動機を語る際に、当時の自分の言動について次のように触れている。

《戦争が終わったばかりで、日本の全体的な風潮が左翼的なことだったと言うことだ。(略)で、逆にそのような姿勢をとらなかつた僕が、社会に遊離してゐるといふやうな風に思われやすかつたし、もつと極端な言葉で言へば、ファッショの犬などと言はれたりした。》〔22〕

敗戦後の俳壇での重信の言動が、客気ある「国士」のごとく受け止められたのである。このように少なからぬ影響を受けていたわけであるが、敗戦後の占領下、日本を支配する思想は一変する。その時代の流れの中で、久保田、ひいては平泉の皇国史観そのものは、重信はその後に苦悩の経験の中で封印している。それに関する言葉はわずかであるが、こう述べている。

《しかし、あの皇国史観はなやかなりし時代も遂に終わりを告げた。》〔23〕

この言葉は一般論というよりも当時の重信の率直な感慨であろう。そして重信の作風にも変化がみられる様になっていくのである。

## 6 その他の影響

ここで今一度、戦前期の重信に影響を与えたものを探ると次のことが分かる。

重信は、「少年期から青年期にかけての私に、いちばん大きな影響を与えたものは、たぶん、辰野隆、鈴木信太郎、渡辺一夫などを中心とする主としてフランス文学の古典に関する本であった」と回想している。〔24〕戦前期、西洋文学の翻訳書が溢れていた。

フランス文学観の摂取と自由な詩精神、そして言葉の象徴性。象徴主義は言葉の宇宙を作り、外部と対峙する。終生影響を受けたリラダンから一つのコスモスを作り上げる。重信はそこでサンボリズムを通過したかどうかを重視するようになる。これにより俳句形式への詩の獲得を果たしていく。そして、敗戦後の病床により深層の詩的想像力、詩意識の変革として現れてくる。

そして、ここで触れておくが、同じ西洋詩の洗礼を受けた鮎川信夫はリベラルな批評的視点を得た。しかし、戦時下の皇国史観には反発したもののその呪縛から解き放たれなかつたと告白している。〔25〕

次に肺結核と戦争体験があげられる。

結核は、彼の時代の宿痾、「死を招く青年病」である。四二年に罹患し、その年の死亡者数は一六万人。子規の言葉を借れば「罪深き者」に身を連ね、「死ぬまでの予後」に身を置く。そのため、重信は同じ宿痾の石川啄木の享年まではと己の生を短く区切り、短距離ダッシュを繰り返す。自分の生を急ぎ立てていくとともに、次第に霊化していく。

戦争については、十五年戦争下、失命の時代に若者は、「目に見えない重圧からのがれたい」ため「目前にある死について」意味づけをしようと楠木正成以外にも吉田松陰や『神

皇正統記』などを渉猟していたのである。〔26〕

重信の場合は、肺結核発症による徴兵検査丁種不合格。この意味することは太平洋戦争下、戦場に立てない若者は非国民であるということであった。そして友人らが続々と徴兵される中で劣等感を抱き、また長者であった家の一員として身の置き所がなかった。人生が閉ざされ、「銃後の冬蠅」として、社会からも遮断される存在となる。実際、弁護士となる夢も断念せざるを得なかった。

その様な状況下の重信の抛り所として楠公・後南朝があつたのである。また一方に、心の片隅の世界としてリラダンの領域が作られていった。ここでは、皇国史観とフランス文学観の思想・象徴主義との重層性が見られる。肉体化する皇国精神に象徴主義を釣り合わせ、併存していた。そして、詩歌に耽溺することより正気を保ち、療養生活により思索的で観念的・耽美的なものに接近していく。

また、死神を見つめる時間が作家的準備期間となり、敗戦後のアドバンテージとなった。

## 7 戦後の出立く「敗北の詩」

敗戦後は占領下において、どの世界でも立場が逆転する。戦前のファシズムや皇国史観は全て否定される。重信らの戦中派は、戦時下に自己を確立せざるを得なかった深い傷跡を持つ世代である。敗戦と社会の変革による将来への失望と内部崩壊。重信は、その虚脱・虚無状態により事件と思われる事態を生じさせている（「4高柳重信への影響」参照）。その後の豊かな軌跡を見るには、挫折が必要であった。

翌四六年に「群」を復刊させた頃より精神的にも落ち着きを見せてくる。敗戦後の困窮と死病の床からは脱してはいないものの、闘病生活は自己省察を促し、内面追及を進める。そして、「期待感と情熱が掻き立てられる」時を迎える。「敗北」は、自らの弱さと痛みを受け止めることで前進へと展開できる。翌四七年、二四歳で「敗北の詩」を表す。但し、その立ち直りの時の早さが、重信の傷痕の浅さを意味するものではない。

そして、新たな思想形成・自己形成は、戦中派の重信の最大の課題でもあった。これは重信のみならず、戦後においてはどの若者も同じである。重信より一歳年下の吉本隆明は、「つまりぼくもじぶんの思想をどうやって形成してきたか」というと、味方をやっつけることで形成してきたようにおもうのです」と述べている。〔27〕

敗戦直後、社会は理想と論争の季節であり、時代の変革期に評論が創作を先導していった時期である。「評論を書くことで、新しい自分になってゆく」と重信も語る様に、さまざまな評論活動とその論争を通じて自分の思想・理念を形成していく。石原八束は、重信が同人誌「薔薇」を擁して論戦を挑んでくる「人斬り以蔵」であったと語っている。〔28〕後述の「敗北の詩」のように次々と評論を発表し、「刺し違えて死ぬべき敵を求め」（塚本邦雄）、挑んでいったのである。これらのことが、重信を成長させていった。

この姿勢は、後年の金子兜太との論争にも現れていく。重信の孤絶した状態からの立ち直りを促したものが「第二芸術」論争である。詩心を鼓舞したのは批評家であった。重信は敗戦後の運命に毅然とした決意によって、背水の陣を構えて反論に打って出た。敗北の経験を経て、それをばねに現実に向かい直す時、重信に批判性が生まれた。

「敗北の詩」により俳句を危険な形式とし、この不毛なる形式に向き合うという確乎た

る思想に立ったのである。この論は、「瀕死の俳句形式と瀕死の高柳が出会って生まれた」(坪内稔典)。孤独な己の内面を嘗め尽したものの勝利といえよう。これにより、皇国史観とは異なる権力に一番遠いものとして、「個人に及ぼす影響が最も少ない詩型」として俳句を選択する。これは、重信のエリート意識による不毛の詩型の選択でもあった。いずれにせよ、これは戦前の皇国史観への訣別である。

しかし、青少年期の柔らかな感性、病床での鋭い感性に浸潤した皇国精神は、その精算までには至らなかった。日本的なるもの(日本主義)として重信の心の深層に残ったままであったことは後に明らかとなる。

この「敗北の詩」の誕生には、第一次世界大戦後のシュールレアリスムの出現と同様、灰燼の中から生まれた創造性がある。これは、戦前の思想の否定による自己崩壊の体験の度合いに応じて、それから脱出した表現の獲得を意味する。

覚悟を決めて書くということは、生きる姿勢を整えることである。俳句詩論の根幹が生まれる。重信の凝視が正鵠な批評眼となり、徹底した批判を生む。齒に衣着せぬ批評が展開されるていくのである。「敗北の詩」から引用する。

《いちばん重要な問題は、時代の流行に逆行する俳句文学そのもの、いわば反社会性、ならびに、敢えてそのジャンルを選択した俳句作家の反社会性を、如何に明確に、正直に自覚するかにかかっていると思う。》〔29〕

「詩人とは、絶えず批評を行なつて遂に倦むことのない精神」に近づいていく。文学とは言葉による表現であり、言葉の秩序の発見は思想の発見である。そして、象徴主義により内面を見つめ外界に対峙していく。病床から佳句を世に送るのである。三好行雄流に言え、「札付きの西欧主義者」となる。そして、象徴主義は皇国精神の要石ともなる。

「敗北の詩」(四七年)の前後の表現の変化を捉えるために、その時期の句を上げる。

梅雨嵐勤皇のこと世にすたれ

(四六年「群」「戦後の西東三鬼」『全集Ⅱ』)

身をそらす虹の

絶巔

處刑台

(五十年『落子』『全集Ⅰ』)

『落子』の作品は、病床からのさよならの合図であり、「夭折を覚悟した青年の一途な思いの結晶」である。創作の刹那に死の不安を超越していくことで、危機の中から作品が生まれていった。

ここに「敗北の詩」をスプリングボード(跳躍板)として、それ以前との思想・表現における訣別を見て取ることができる。

## 8 戦後後半の変遷

加藤郁也は、重信についてこの様に述べている。

《高柳重信は独自の皇道観を持っていた。超然たるその日本主義は内に秘していたと言い改めるべきかもしれない。俳句の話が大方出尽くして対酌酣となると憂国の志情鬱勃と湧出するものごとく、大楠公の忠義から南北朝へと話頭転回。吉野朝の悲哀をひとり引き受けたかのように嗚咽した。その皇道精神が戦前戦中に養われたのは論を俟たない。こ

れが伸展し成熟するのは『日本海軍』腹案を固める時分からであろう。〔30〕  
郁平の言葉に沿って見ていけば、その伸展としては、六五年の喀血後の入院生活での「自然から語りつづけられる体験」が大きい。

《その山には、それにふさわしい靈魂がひそんでいると信じられていた時代であれば、それはすなはち、人間の精神と直接につながる思いであったわけである。》〔31〕

重信が靈魂や呪術的なものへの憧れを口にするのは翌六六年からである。肺結核の死の危機からの脱出により意識は深層・古層に向かう。当時、創作が停滞ぎみであったが、その後は創作意欲が戻り、作風も転換していく。

その自然を入口として七一年の飛騨行。

死を意識して来た半生により重信は靈魂の世界へさらに開かれていく。書斎派であった重信の自然との邂逅。この飛騨の自然の奥の神々の存在。隅々にまします靈の生動と言霊を見て取った。それによる「飛騨」一〇句は重信の「絶唱」と言われている。

#### 飛騨の

美し朝霧

朴葉焦がしの

みことかな

〔「飛騨」山海集』全集I〕

作品には、道標を発見した重信の自持が現れている。ここにおいて、感受性の基底への「自然的秩序の憧憬と崇拜感情」（大岡信）から重信の関心が古代へ向かう。それにより、重信の古層に秘していた皇国精神が浮上し、重信と契合していったものと言えよう。この飛騨行が第二のスプリングボードであった。

これは、単なる過去へのノスタルジーではない。古層より現代を照射するものである。この後に、「詩人は間違えたら腹を切るくらいに覚悟が必要」と語るようになる。そのいわば皇国精神に基づく作品の例としては、次の句が相応しい。

天に代りて

死に行く

わが名

橘周太かな

〔「日本軍歌集」『前出』〕

橘中佐は、日露戦争時の軍神。彼を賛美する「橘中佐」の歌詞は、「(略)霧立ちこむる高梁の／中なる塹壕声絶えて／目醒めがちなる敵兵の／肝おどろかす秋の風」である。

この歌を本歌取りし、重信自身の俳句への献身の心情を発露したのが次の句である。

目醒め

がちなる

わが盡忠は

俳句かな

〔「前出」〕

そして、評論活動においては、俳句への尽忠が内面に収斂するとともに批判精神として現れていく。

## 9 おわりに

重信は、晩年に「俳句形式は器でなく思想である」とした。戦前期からの日本と西欧の思想を身に着け、孤高な貴族的精神を纏う。重信は戦前期の精神を曳航する時代錯誤の船長ではない。

戦後の短詩型文学が成熟する過程において、その課題を体現する人物が登場する。その一人が重信であり、戦後のフロントランナーかつ最終ランナー。新たな俳句形式のもと疾走した。まさに、将星の存在であった。

しかし、新たな思想、俳句形式を顕在化するには、第三のスプリングボードが必要であった。最後には俳句形式に命をすり減らす。俳句との相対死とでもいふべき死であった。重信が親しんだ地霊・言霊がその永遠の船出を見送ってくれている。

おーいおーい命惜しめといふ山彦

(「山川蟬夫句集以後」『全集I』)

了

## 注記

- ① 高柳重信「俳句の廃墟」『高柳重信全集Ⅲ』(以下『全集』と表記) 立風書房西暦 1985年
- ② 高柳重信「『落子』の周辺」『全集Ⅲ』85年
- ③ 高柳重信「わが心の恩師を語る 死ぬまで先生の名前を」『高柳重信散文集成第一六冊』(以下『集成』と表記) 夢幻航海社 2002年
- ④ 高柳重信「『落子』の周辺」前出
- ⑤ 田中正俊『戦中戦後』名著刊行会 01年
- ⑥ 高柳重信「前衛派の諸論説について」『集成八冊』99年
- ⑦ 高柳美知子「思い出すことなど」高柳落子HP(潮汐性母斑通信)より
- ⑧ 立花隆『天皇と東大』文藝春秋 12年
- ⑨ 片山杜秀『皇国史観』文藝春秋 20年
- ⑩ 植村和秀『丸山眞男と平泉澄』柏書房 04年
- ⑪ 若井敏明『平泉澄』ミネルヴァ書房 04年
- ⑫ 田中卓編著『平泉澄博士全著作紹介』勉誠出版 04年
- ⑬ 立花隆「平泉史学と陸軍」『前出』
- ⑭ 高柳重信「『落子』の周辺」前出
- ⑮ 片山杜秀『前出』
- ⑯ 高柳重信「略年譜」『高柳重信全句集』沖積社 02年
- ⑰ 高柳重信「戦後俳句について」『俳句研究』一九七一年五月号『集成第一二冊』01年
- ⑱ 若井敏明『前出』
- ⑲ 高柳重信「『落子』の周辺」前出
- ⑳ 植村和秀『前出』
- ㉑ 高柳重信「神田秀夫戯論」『俳句研究』一九五五年八月『集成第四冊』98年
- ㉒ 高柳重信「現代俳句の断層」『俳句研究』一九六〇年三月号『高柳重信対談・座談会集第

- 一冊』(以下『座談会集』)夢幻航海社03年
- ②3 高柳重信 「俳句史の問題など」 「俳句研究」一九七六年四月号『集成第一四冊』01年
- ②4 高柳重信 「模糊たる来し方」 『全集Ⅱ』85年
- ②5 鮎川信夫 『戦中手記』思想社65年
- ②6 色川大吉 『ある昭和史』中公文庫75年
- ②7 吉本隆明 『わが昭和史』ビジネス社20年
- ②8 石原八束・高柳重信 「現代俳句協会の来し方行くえ」 『現代俳句一九七〇』 『座談会集第一四冊』04年
- ②9 高柳重信 「敗北の詩」 『全集Ⅲ』85年
- ③0 加藤郁平 「皇道と俳道」 『高柳重信読本』角川学芸出版社09年
- ③1 高柳重信 「俳句の廢墟」 前出